



馬居 政幸 静岡大学教授

生きる場への知的謙虚さを

— 変化流動する消費社会に育たざるを得ない子どもたち —

人は真空のなかで育つわけではない。今という時空が変化を常態とする世界である以上、そこで育つ者を見る普遍（不変？）的な視点の存在を前提にすること自体が時代錯誤。問題は子どもではなく、変化する時空の方である。

このような立場から、最近、消費社会を生きる子どもたちの特性と課題について論ずる機会を得た。※その一端を紹介することから、本稿の課題に応えたい。

まず、消費社会とは、そこで生きる者にとつてどのような特性をもつか。次のように定義しておきたい。

「消費という行為が、消費対象の商品が持つ直接的な機能の必要性ではなく、社会的位置とセットになった自己自身を象徴する記号を獲得するためのものに変わること」

たとえば、音楽を聞くという機能を重視するのみならず、レコード、テープ、CD、MDと新たな技術の開発に伴って商品化される再生機器を買い続ける必要がどこまであるか。まして、ウォークマンに始まる小型再生機を、それも非常に細分化された機種から選んで、わざわざ人目にふれるところで携帯する必要性はどこにあるか。おまけに、TPOに応じたファッションとセットで表現するのはなぜなのか。このように考えれば、消費という行為とそれに伴う価値意識や自己形成の特性を想像できよう。

すなわち、消費社会では、消費により獲得する物が記号になるばかりでなく、消費する行為自体が自己の存在証明であり、アイデンティティの中核を形成する記号表現とな

る。それは、何を着て、どこで、だれと、いつ、どのような言葉遣いで、どんな気分分というところが、すべて消費行動とセットで位置づけられることを意味する。いいかえれば、消費社会とは、消費行動自体が自己の位置を確認する記号の集積になる社会であり、人が自分が何者かを明らかにするために、何らかの商品を獲得しなければならぬ社会である。何を購入するか、という行為が、自分がどのような人間か、ということと密接不可分の社会といえる。

もつとも、何らかのモノの交換あるいは交換する様式や交換されたモノの使用方法が、所属する世界を表現する記号になるということ自体は、いずれの社会にも存在する。ただし、記号が示すのは、固定された社会的位置であり、その配分様式自体は、前もって定められたものとして、世代間の学習（社会化）の対象となる。だが、消費社会では、これも購入可能な商品が記号になるために、社会的位置を確認するために商品消費し続けなければならない。

もつとも、消費社会化が進行する以前に自己形成した者にとつては、消費社会は、一面では社会的地位（階層）の移動を容易にする開かれた社会となる。消費は選択の問題であつて、新たな社会的地位を求めなければ、商品消費す

る必要はないからである。

だが、消費社会に生まれ育つ者にその選択肢はない。自己を形成する過程にある子どもたちにとつて、何を買い、何をもち、何を着て、何を飾るかということと離れて自分を表現する選択肢を見つけないことは困難。すべてが商品とかわつて、それもどこでどのようにだれと買うかが、自分とはだれなのか、という問いへの答えとなるからである。消費という行為が自己を明らかにする過程それ自体となる。

このような消費文化を内在化する自己形成の過程は、一方で過去の伝統に閉ざされた世界からの解放を意味する。だが、他方で、消費社会は、良くも悪くも、長い年月をかけて培ったその社会に適した人になるための文化（発達課題）の枠組みを崩壊させる。その結果、そこで育つ者に対して、幼児期から思春期を経て一人の人間として自立する過程において獲得すべき課題自体を流動化させる。次々と生まれては消えていく商品との関係を自己形成過程に取り込まざるを得ない以上、そのアイデンティティもまた自由との引き替えに安定性を失わざるを得ないからである。

そして、日本社会が本格的な消費社会の段階に入ったのが「金ピカの時代」と総称される八十年代。そのピークが

今、二十代後半の団塊ジュニア以降である。ただし、彼ら彼女らはその数の多さから、アイデンティティを構成する独自文化（カウンターカルチャー）を形成し得た。その代表がジャンプ六百万部。その意味で、内在的に理解する手掛かりはあった。だが、同年齢の仲間すら失いつつある現在の少子世代にとって、アイデンティファイの対象はどうなるか。もし、独自の文化を創造する仲間とパワーを失いつつあるとすれば、変化流動する消費行動のなかを迷い続けるをええないのではないか。逆に、学校という農業社会を工業社会へとキャッチアップさせるための制度、すなわち消費社会以前の枠組みによる仕組みが要請する視点でその生きる姿を理解しようとすればどうなるか。自己理解の鏡を求めてさまよう子どもたちの不可解な行動や意識を確認するだけであろう。では何が必要か。二点指摘したい。

その一つは、新たに生まれ育つ者を、常に異なる文化に生きる者として位置づける視点。異文化理解の課題はいずれの文化も等価であり、自己の文化を基準に相手の文化を理解しないこと。可能な限り新たに生まれ育つ者の側にたつて、その意識や行動を理解することが求められる。

その二つは、意識や行動の特性を、生きる「場」の変化とセットでとらえる視点。新たに生まれ育つ者の特性を、

それを生み出すさまざまな社会的条件や社会的文脈と関連させつつ理解できるかどうかである。

あえてこのような視点を強調するのは、私の偏見かもしれないが、子どもについて論じられる際に、次の二つの前提があるように思えてならないからである。まず、子どもという概念（コンセプト）自体に、時代を越えたブラスイメージの価値が付加されなければならないという前提。さらに、そのブラスイメージの基準が、子どもを論ずる人自身の良き子ども像が無前提に入りがちである、ということである。もちろん、社会認識の基本原理として、いかに厳密な科学的手順を踏もうとも、論者の価値観から自由になる認識はありえない。むしろ、積極的に自己の価値を明示することで認識の妥当性は確保される。だがそれは自己と認識対象の価値を等価におく、知的謙虚さが前提。

ただし、このことは現在の子どもの問題がないということでもなければ、今育ちつつある人たちが克服すべき課題がない、ということでもない。安易な同調や無責任な価値評価は、かえって子どもたちの世界を歪めることになることもまた自戒を込めて指摘しておきたい。

※拙稿「消費社会の子どもたちの行方―『子ども文化』の変容（『迷走する現代と子どもたち』第5章 東京書籍）

「子どもを見る視点」変化にどう対応するか

提言



有田 和正

教材・授業開発研究所代表

常に疑いながら「みる目」を鍛えていく

一 子どもの変化は社会の変化のあらわれ

子どもが変わってきている。キレる子ども、暴力をふるう子ども、集団になじめない子ども、学校をいやがる子ども、先生を先生とも思わない子ども、いうことを全く聞かない子ども、わがままいっぱいな子ども、大人のようにまかせた子ども、いつもしらけている子ども、意欲の全くない子ども、自分の好きなことしかやらない子ども、かわいげのない子ども（子どもらしくない子ども）、等々、子どもの変化をあげたらきりがなくらいである。

今あげたような子どもは、以前にもいた。ただ、その数が少なく、問題になることはなかった。

わたしのように昭和三〇年代から教師をやってきた者には、今の子どもは変化が大きすぎるように感じられる。しかし、最近、教師になった人からみれば、変化でも何でもないはずである。とらえやすいはずである。

ところが、若い教師が、「今の子どもは何を考えているのかわからない」となげく。「宇宙人のような感じで、とらえどころがない」という教師もいる。

そういえば、「子どもがかわいい」という教師が、めっきり減った。「かわいげがない」という教師の方が、圧倒的に多い。

これでは教育はできない。

子どもがわかり、子どもが求めているものをつかんで、

特集 「子どもを見る視点」の崩壊

●提言・「子どもを見る視点」変化にどう対応するか

電子メディアの中での成長がもたらすもの………深谷 昌志 5
 生きる場への知的謙虚さを………馬居 政幸 8
 常に疑いながら「みる目」を鍛えていく………有田 和正 11
 子どもが発信する「かたち」の変化と教育の「かたち」………葉養 正明 14
 「鳩派の寄り添い型」から「鷹派の出直し型」へ………野口 芳宏 17

●現代の子どもたちは何を求めているのか 現場からの証言

秩序と安定をもたらす教師の指導力………大谷 和明 20
 子ども姿は大人社会の投影………高橋 勲 23
 「生きる力」を育ててくれる『本物の教師』………宮永 正行 26
 子どもたちに「質的変化」が生じている………戸田 正敏 29
 システムの中で自由・知性を求める子どもたち………雨宮 久 32
 「自分の居場所」と「達成感」………渡辺 喜男 35
 必要なのは教師の想像力………岩下 修 38
 「寝たい」と言う子どもたち………前田 康裕 41
 「誉め言葉」を求めている………善能寺正美 44
 ●子どもの変化を見る確かな眼とは………富田富士也 47
 健気さ、いじらしさに気づいていますか………小池 俊夫 49
 「子どもの分際」という視点の再考を………星野恵美子 51
 教師に必要な力「ダメな子」はいない………大江 浩光 53
 子どもの変化を見る確かな眼と変化を見つけるポイント………佐藤 幸司 55
 美意識を育て、言葉遣いを正す………岸岡 浩子 57
 たいくつしていないか………

●子どもの変化が見えないための失敗

授業編

時代・世代によつて変わる解釈………山之内正和 59
 我流の授業三恵を廃し、向山型算数に学ぼう………小林 幸雄 62
 「子どもが変わった」は教師の言い訳………小松 裕明 65
 待っても叱っても無駄………森本 仙子 68

●子どもの変化が見えないための失敗

生活指導編

必死に努力すれば見えるようになる………河田 孝文 71
 独善的になった時、子どもの変化は見えない………上木 信弘 74
 「死んでやる」と言う子に逆ギレした青年教師………大堀 真 77
 「筋を通した後、あたたかく接する」から学ぶ………馬場 慶典 80

●連載 校長の仕事と責任・2 学校を開いても責任をとれるか

大森 修 83

●連載 危機意識の薄いことが危機

野口 克海 88

教育ニユース・ズームアップ

1 文部省が子どもの生活で国際比較………安達 拓二 93
 2 東京・世田谷で全校に学校協議会………
 3 学校協議会で「マニュアル」を作成………

●連載 新旧教育文化のたたかい・2 教材戦線—新教育文化の軍門に下った旧教育文化—

向山 洋一 101

●連載 シレンマ教材で道徳的実践力を育てる・2 ピアジェにみる道徳教育………

荒木 紀幸 106

●連載 学校で創るカリキュラムの開発・2 太秦みどり学習—京都市立太秦小学校—

水越 敏行 111
 浅井 和行